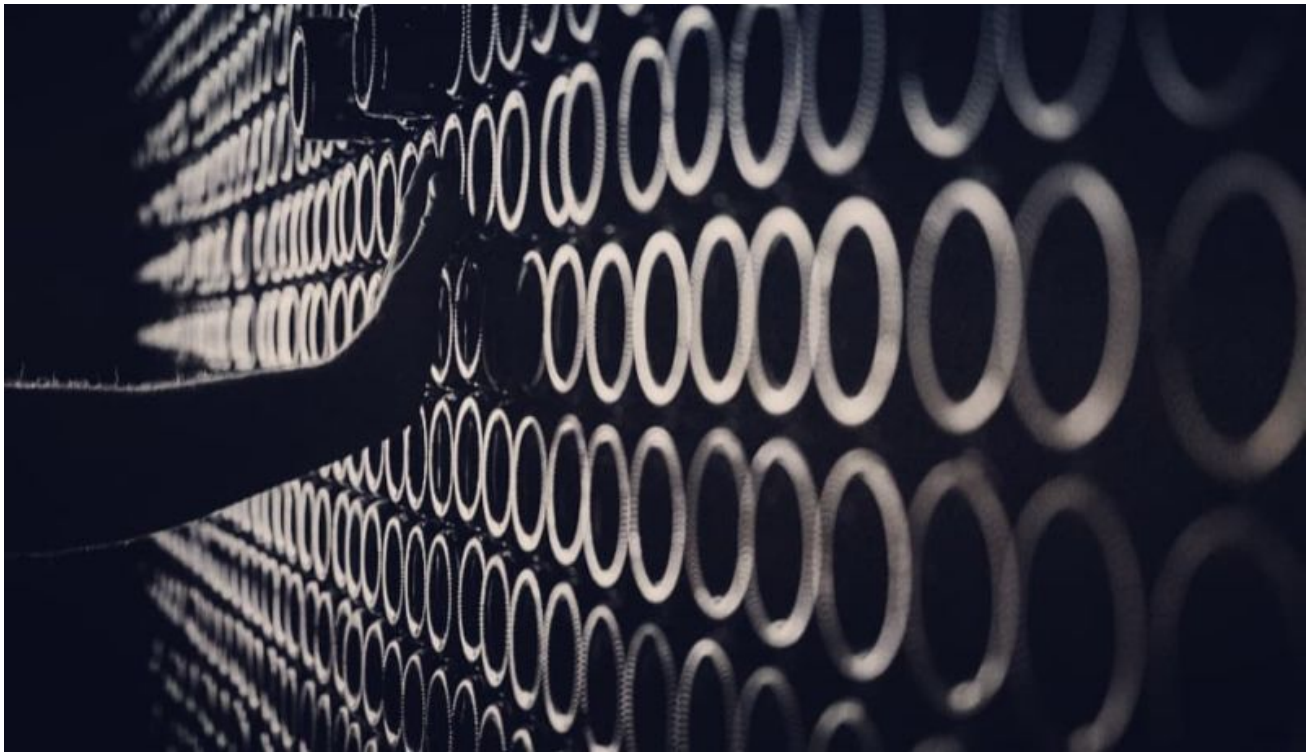
イタリアのワイン在庫、10月31日時点で7.2%増の4,770万ヘクトリットル

新たな収穫分が貯蔵に加わり、イタリアのワイン在庫のほぼ3分の2が北部に集中

2026年11月10日（火）



イタリアのワイン在庫は10月31日時点で47,692,577ヘクトリットルとなり、前年から3,200,918ヘクトリットル増加した。イタリアの農産食品における品質と不正を監視する検査機関ICQRFが発表した最新の「Cantina Italia」報告書で明らかになった。前年同期比の増加率は7.2%で、世界有数のワイン市場の一つで在庫負担が重くなっていることを示している。

同報告書によると、10月31日時点でイタリアのワイナリーには、マストが1,580万ヘクトリットル、発酵中の新酒が1,370万ヘクトリットル保管されていた。2025年の同日と比べ、マストの在庫は10.6%増加した一方、発酵中の新酒は4%減少した。

ワイン在庫は9月30日との比較では、さらに大幅に増加した。1カ月で6,652,468ヘクトリットル、率にして16.2%増えた。マストは23.0%、発酵中の新酒は55.1%増加しており、新たな収穫分が貯蔵・加工工程に入ったことを反映している。

月間の増加幅は大きいが、それだけで需要の低迷を示すとは限らない。在庫データが示すのは、ある時点で物理的に保管されている製品の量だ。これだけで販売の鈍化が証明されるわけでも、商業的な余剰が測れるわけでもない。10月の急増は、収穫したばかりのブドウから造られたワインがワイナリーに入り、登録在庫が通常増加する秋の収穫期という背景も踏まえて見る必要がある。

ワインの数値は、登録義務のある事業者がイタリアの電子ワイナリー台帳に申告した実在庫を指す。したがって、対象範囲は規制対象の事業者に限られる。また、ワイン在庫の数値にマストと発酵中の新酒は含まれず、報告書では別々に集計されている。

地域別では、引き続き北部への集中が顕著だった。ICQRFのデータによると、イタリアのワイナリーが保管するワインの61.2%は北部地域にあった。ヴェネト州だけで全国総量の26.9%を占め、在庫量は他州を大きく上回った。州内ではトレヴィーゾ県とヴェローナ県の量が最も多かった。

在庫は格付け別にも偏りが見られた。原産地呼称保護ワイン（イタリア語でDOP）は保管中のワインの56.9%を占め、このカテゴリーでは白ワインの割合が大きかった。地理的表示保護ワイン（IGP）は全体の25.6%で、この区分では赤ワインが多かった。

マストは、完成したワインよりも南部への集中度が高かった。マスト在庫の最大シェアを占めたのはイタリア南部で、プーリア州だけで全国総量の37.6%に上った。これは、初期段階の生産やブレンド用原料における同州の重要な役割を示している。

在庫の大きな部分が少数の銘柄・産地に集中していることも、データから明らかになった。報告書によると、登録されている地理的表示は522あるものの、上位20の呼称が、認定ラベルに紐づく在庫の59.6%を占めた。単独で最大のシェアを持つのはProseccoで12.5%。次いでPuglia IGP、Toscana IGP、DOC delle Veneziaが、それぞれ3.7%だった。

10月31日時点の在庫統計が発表された時点でも、市場ではイタリアの新たな収穫量の規模を見極める動きが続いていた。欧州委員会は新ヴィンテージの生産量を4,100万ヘクトリットル強と推定しているが、最終的な商業面への影響は、そのうちどれだけが市場に出るか、国内外の流通経路でどの程度の速さで動くか、そして冬の間にどれだけが在庫として残るかによって左右される。